

田園調布学園大学「福祉考房」の取り組み ～社会福祉士養成課程における実践学習の試み～

かわ な まさ あき
川 名 正 昭

〈要 旨〉

近年、学生の学力低下が問題となっているが、知識の詰め込みではなく、学問そのものに関心を持つよう、様々な実践学習が試みられている。大学における実践学習の取り組みは、文部科学省のGP(Good Practice)などでも多く見られる。工学分野では理論と実践を通して理解を深め、学生の自由な活動を積極的に支援する金沢工業大学「夢考房」のような取り組みが高い評価を受けている。

現代の日本では、地域での自立した生活を送るとともに、誰もが自分らしくいきいきと暮らしていけるよう、一人ひとりを尊重し、お互いに支えあうことが求められている。この自立生活を豊かにするためには、福祉用具の活用などによる自助や地域住民による共助が重要である。援助者は、そうした支援技術・サービスを創出したり、コーディネートしたりする能力がより一層求められることとなる。これら能力は机上の学びだけでなく、実践学習との組み合わせでより深く理解し、身につけられるものと考えられる。

本学で取り組む「福祉考房」では、4つの具体的な実践学習を進めている。活動に参加した学生へのアンケート結果から、福祉考房の取り組みは学生の意欲を向上させ、福祉への理解を深めるために有意義であることがわかった。また、大学の地域貢献活動としても意義のあるものである。この取り組みが、福祉援助者としての成長を促し、将来の進路にも好影響を与える実践学習のひとつであることを示せた。

〈キーワード〉

社会福祉士養成課程 福祉考房 実践学習 意欲向上 地域貢献

I はじめに

近年、大学を取り巻く環境は急速に変化し、大学ごとの教育実践を特色化する「特色GP」や「現代GP」が進められてきた。平成20年度からは両GPを統合した「教育GP」が始まり、大学教育の充実を図っている¹⁾。工学部などでは学生が自主的に活動し、自由な発想でモノづくりができるような“工房”の設置が増えている。その中でも、金

沢工業大学の「夢考房」は実践学習を通じた学生の意欲向上を図る、評価の高い取り組みである。

本学のような社会福祉士養成校においては、社会福祉士の受験資格を得るための必修科目がカリキュラムの中心であり、関連分野の選択科目を履修することで更なる理解を深めていくことになる。しかし、それら科目の授業形態については講義が多く、学生が受け身であることも多い。演習や実習も選択科目にはあるものの、学生が積極的に実践現場へと出て行く機会は十分でなく、また支援技術としての福祉用具に接する機会も少ない。

日本では少子高齢化が急速に進んでおり、2007年には高齢化率が21.5%と初めて21%を超え、2055年には高齢化率が40%を超えると予想されている²⁾。また、介護保険の改正や自立支援法の制定など社会の変化に伴い、地域における自立生活が強く求められるようになってきた。このような中、在宅での豊かな生活をいかに送るかが今後の課題となってくる。加齢や障がいのために生活しにくい部分は、福祉用具を活用しての自立や近隣住民との助け合いなどがより重要になり、社会福祉士に対してもそうしたコーディネート能力がより一層求められることとなる。

本学では2007年度より、学生が講義で得た知識を活用し、自主的な活動を支援するために、実践学習の場として「福祉考房」を設置している。本稿では、この「福祉考房」で実施した4つのプログラム結果と参加した学生からのアンケート結果をもとに、社会福祉士養成課程における実践学習の方法について検討する。

II 実践学習の取り組み

1. 大学における取り組み事例

(1) 金沢工業大学 夢考房^{3) 4)}

理論と実践を通して理解を深め、学生の自由な活動を積極的に支援する取り組みとして、1993年に金沢工業大学が「夢考房」を設立した。夢考房は2002年に文部科学省の工学教育賞、2003年に特色GP採択、2007年に産学連携による実践型人材育成事業採択など、その先進的な取り組みが評価されている。

夢考房は「遊びから創造へ」をテーマとし、「知識・技術」を応用する基礎的能力、積極的にチャレンジする自発性や持続性、感動や共感を呼ぶ表現力など創造性を養うことを目的としている。

運営に関しては、一般学生が利用しやすい環境を整えるために、学生運営スタッフ制度を導入し、学生の自主運営を基本に管理運営を行っていることも特徴的である。

(2) 神奈川工科大学 KAIT 工房⁵⁾

学生のものづくりに対する夢や希望をかなえる場所、気軽にものづくりの楽しさを体験できる場所として、2008年4月に創作活動専用の施設「KAIT 工房」を設立した。約2,000㎡という広大で落ち着いた空間の中で、学生の自主的・創造的活動を促進していくため、設備等を提供し、専門スタッフの助成、助言等を行っている。

また夢の実現プロジェクトという経済的支援を主目的とした独自のシステムもあり、年間10～20の学生プロジェクトが支援対象として採択されている。

プロジェクトは単なる経済的支援のみでなく、プロジェクト選考へのエントリー、報告会、活動・会計報告書の提出などの活動プログラムを通して、実社会で直面する経験を積み、自己成長のステップとすることも目的としている。

(3) 松本大学 地域づくり考房『ゆめ』⁶⁾

地域づくり考房『ゆめ』は、学生への教育を目的に講義で学んだ知識や技術を、地域づくりの中で実践的に生かしていくことを目指している。講義で学んだ内容をさらに広げ、地域社会の中で生きた学習活動を地域の方々と一緒に進める、学生主体の活動への支援を行っている。地域づくり活動を通して社会の様々な課題と向き合い、その解決に向け実践することで、地域づくりの担い手としての自覚と自信につながる。

具体的には、「朝日村IT化支援プロジェクト」「大学連携防災プロジェクト」「ベロタクシー（自転車タクシー）」など地域に根ざした様々な取り組みを行っている点が、(1)、(2)で述べた工房とは違った特徴である。

2. 社会福祉士養成課程における実践学習について

前節では工学部や経営学部などの取り組みについて紹介したが、社会福祉士養成課程における実践学習はどのような取り組みが可能なのか。

現代の日本の福祉は地域における自立生活が重要視され、援助者は当事者がより豊かに生活できるよう様々な知識や援助方法を身につけておく必要がある。援助方法には様々なあるが、そのひとつとして福祉用具の有用性を考える。

福祉用具は介護保険法の施行に伴い、要介護者等の日常生活を支える身近な道具として、急速に普及・定着してきた。また、使用する人の障害の程度、利用者の能力・環境等を踏まえて選択することで、低下した身体機能などを補いながら、住み慣れた地域や自宅で安心した自立生活を送ることが可能となる。⁷⁾しかし、利用者の誤使用や使用している福祉用具と身体能力が不適合であるなどの理由から重大な事故に及ぶ例も見られるようになった。

援助者にとって福祉用具は援助を効率よく行い、自己の負担を軽減できるものである。

負担を軽減することは手を抜いていることと勘違いされることもあるが、決してそうではなく効率よく援助できれば、さらに他のサービス提供を行ったり、援助技術や質の向上に時間を費やしたりすることもできる。

シルバーサービス振興会では2003～2004年度に福祉用具と住宅改修の知識・技術を有する専門職の養成に向けた専門委員会⁸⁾を設置し、福祉環境整備の必要性と専門職の確立を検討してきた。同振興会によれば、図1のように「福祉用具」「住宅改修」「保健医療福祉の一般知識」の3つを併せ持つ専門性を身につける必要があるとしている。

これらの専門について、大学の福祉教育において知識として得ることはできるが、実践経験をもつことは系統立てて取り組まれているわけではない。現状は選択科目で知識を得て、福祉住環境コーディネーターや福祉用具専門相談員などの資格取得で補っている。これらの学びで得た知識の理解を深めるためには、身近に実践できる場や機会が必要であるとする。

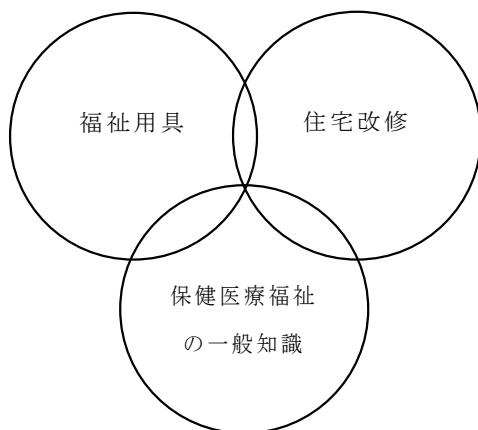


図1 高齢者等の居住環境整備のためのアドバイザーの有する専門性

※出典：シルバーサービス振興会『福祉用具と住宅改修の知識、技術を有する専門職について』

福祉現場の状況を考える。もちろんすべての現場ではないが、実習を終えた学生の情報や実習巡回時、施設訪問等の際に車いすや福祉用具が整備できずに放置されたり、未整備のまま使用したりと不適切な使用の事例を見ることがある。「リハビリテーション専門職と中小企業技術者の視点で見た福祉用具の課題と可能性調査」⁹⁾によれば、福祉用具に対するニーズと企業側の考えが必ずしも一致しておらず、改良の必要なものも数多く存在することがわかった。これらは専門職として福祉用具に対する知識が不足しているために起こることでもあり、福祉用具の情報を得たり、企業に対して改良提言などがしやすい環境作りも必要である。

つくば国際大学が社会福祉士養成課程を持つ大学、短大、専門学校に対して、福祉用具の教授法を調査した結果¹⁰⁾がある。この論文によると、福祉用具の必要性は理解されているが、一般的には指導要録や教員の考えに基づいた福祉用具が必要最小限の範囲で教材として準備されている程度である。また、福祉用具に関する教育は介護系の授業で実施されることが多いが、教授する科目にはバラツキがあり、福祉教育に系統的に位置づけられていないとされる。さらに、この調査で福祉用具に関連する科目の多くは、ベッドからの移乗や移動などの寝室を想定した場面における介護を想定した内容にとどまっている。しかし、自立を支援するためには、それだけでは不足しており、様々な場面についてのADL(Activities of Daily Living：日常生活動作)を高める福祉用具を知っておく必要がある。

一部の大学では社会福祉士養成課程の充実を目的に福祉工学系科目を設定し、講義、演習、実習科目を通した福祉用具への理解を深めている。その結果、福祉用具への問題意識を高め、卒業論文としての取り組みや福祉用具メーカーへの進路を選択するようになった。

本学では筆者の専門演習で福祉用具について取り組んだ結果、例年は一般企業への就職が目立ったが、2008年度卒業予定者のうち4割が福祉用具の販売・レンタル業などに進路を決めている。学生は直接援助による福祉分野への関わりだけでなく、福祉関連企業による援助の可能性を見いだした結果となった。

以上のことから、社会福祉士養成課程における実践学習として、サービス利用者や援助者のニーズを知ったり、福祉用具に関する知識・技術を身につける方法が適切であると考え、次章では本学で実践する「福祉考房」について紹介する。

Ⅲ 福祉考房について¹¹⁾

1. 設置趣旨

近年の日本の福祉は、地域における住民の自立を支援することを推し進めている。障がいや加齢により身体機能が低下して自立生活しにくい人に対し、その機能を補うために数々の制度や情報システム、福祉用具が存在する。

福祉用具は障がいに応じて作られた特殊なものも多いが、普段使用している道具を少々改良しただけでも生活を便利にすることができる。その発想ができるかどうか自立生活支援の鍵となり、福祉従事者にとって身につけるべき支援力のひとつである。

麻生区地域福祉計画ならびに麻生区広報広聴戦略会議との協働で、高齢者向けのパソコン教室を2回開催した。参加者からは好評を得たと同時に、参加者グループがパソコンボランティアへと発展していく可能性を見ることができた。この教室をサポートした

学生は、パソコンを通じて地域住民の組織化、自立支援、生きがいづくりの可能性・手応えを感じており、団塊の世代の生きがいづくりと実践的地域福祉の展開学習としての有効性が高いと考える。現在は、東京都稲城市や川崎市宮前区の精神障害者施設などからの出張パソコン教室やパソコンボランティアとの協働など依頼が絶えない。

また、地域の施設などからパソコンをサービス向上に活用したいという依頼も増えているため、福祉サービス提供におけるコンピュータ活用の実践的体験を施設と協働でおこなっていく可能性もある。

このような背景から、本学の教育過程において、福祉現場で福祉システムや福祉用具の実践的な活用ができる福祉従事者を養成するため、『福祉考房』を設置した。なお、2008年度については、私立大学等経常費補助金特別補助「教育・学習方法等改善支援」の助成を受けている。

(1) 学生の実践学習による技術・実技の習得と主体的学習態度の涵養

前述したとおり、地域福祉を推進する際には住民の自立生活が基本となる。障害や加齢により自立生活が困難な場合、それを補う方法のひとつに福祉用具の導入がある。福祉従事者の支援方法として福祉システムや用具の取り扱いを知ることは、支援の幅を広げることにもなり非常に重要なことである。

また、実習やボランティア先の施設から、車いすの修理やパソコンのメンテナンスなどを依頼されたり、地域で暮らす高齢者などがパソコンの設置や設定、トラブルを依頼できる人がいなくて困っていたりなども聞こえてくる。

こうしたニーズに学生が応えられるようになれば、パソコンボランティアなどを通してもっと地域との関わりが持て、地域生活や福祉への興味・関心を増すこととなるだろう。

そのため、車いすの分解・修理、パソコンの組み立てなどができる簡単な設備を設置し、1～2年次の基礎演習や3～4年次の専門演習において教育できるようにする。

具体的には作業台や工具を設置し、教員や経験を積んだ在学生などが安全面に配慮しながら作業指導を行う。

(2) 教員の専門分野を活かした研究や地域貢献

福祉以外を専門とする教員は、その専門性を福祉分野に活かすことで、今まで手をつけてこなかった新たな取り組みや研究につなげることができる。このためには、地域や福祉現場で起こっているさまざまな課題に対して、各教員の専門性を活かせる仕組みが必要である。

この取り組みで得た知識や経験を、授業や専門演習など学生の教育に還元していく

ほか、地域課題を解消することで地域貢献を行うことができる。また、地域における大学の実践的価値を高めることにもつながる。

(3) 産学公協同による福祉用具等の研究開発

本学では介護実習等で福祉用具の扱い方などを学ぶ機会はあるが、自分たちが必要な福祉用具を考えたり、作ったりする機会はなかった。障がい者や高齢者の個々人に対応した福祉用具を考えることは、利用者の身体、心理、生活状況を把握し、理解を深めることにもつながる。支援の幅を広げ、援助者としての能力も高められる。

現在、本学の所在地である川崎市では、福祉用具の開発に関わる動きとして、川崎市経済局や財団法人川崎市産業振興財団が進める「かわさき基準(Kawasaki Innovation Standard = KIS)」¹²⁾がある。「かわさき基準」は、住み慣れたまちで、誰もが自立して楽しく安心して暮らせることを目指した川崎市独自の基準である。福祉用具の利用に関する調査や地域の中小企業との連携など、本学との協働についても検討している。

2. 設備等

福祉考房は、後述する実践プログラムとして、車いす整備や自助具製作などを行うため“工房”設備がある。

工房は車いすや福祉用具、自助具製作用の材料などを運搬しやすく、学外の方もアクセスしやすいよう1階部分に設置した(図2)。図3で示す工房内部は、作業台3台、加工用の工作台1台(図4)、工具や材料を収納する収納庫5台程度に抑え、一度に15名程度が安全に作業できるスペースがある。

工房スタッフとして常勤職員1名が常駐し、学生の安全な活動を見守り、教員1名と分担して、車いす整備方法や工具の使い方などを指導、助言している。

また、ガラス張りの外観を利用し、図5のように車いすや福祉用具の展示、説明をおこなっており、来場した学生や訪問客などの興味・関心をひいている。



図2 福祉考房(外観)



図3 福祉考房(内観)



図4 材料加工用の工作台



図5 車いす展示と説明

3. 実践学習プログラム

(1) DCU 地域 PC 倶楽部

本学学生とシニア世代を中心とする地域住民を対象としたパソコンクラブ「DCU 地域 PC 倶楽部」が2007年10月に発足した。この倶楽部は、前述した麻生区との協働で開催したパソコン教室から発展したもので、パソコン学習を通じて学生と地域住民

とのふれあい活動を行うと同時に、本学の地域貢献も視野に入れている。

2年目となる2008年度は、第1、第3土曜日を活動日としている。活動場所は、本学のコンピュータ教室（Windows XP機70台）を無料開放し、印刷用紙などの消耗品費として多少の年会費を徴収している。現在、約70名がメンバー登録しており、毎回約50名が出席している（図6）。通常のパソコン教室のように「先生が生徒に教える」一方通行的な形態ではなく、シニア世代や学生、そして教員も含めてパソコンの活用方法を一緒に考え、そこから様々な取り組みや交流を深めていく形態で行っている。活動が土曜日のため、近隣の高校生がボランティアとして参加することもあり、世代間交流の場にもなっている（図7）。

メンバーの希望で年間活動を計画し、インターネット活用による情報収集方法やデジタル写真の編集、年賀状づくりなど生活に役立つICTの習得を目指している。また、ICT能力の自助グループというだけでなく、高齢者の生きがいづくり、社会参加、世代間の交流等を目的としたシニアネットとして、川崎市麻生区ならではのスタイルに発展させていくことも考えられる。現在はオンライン、オフラインでの交流が深まる中で、参加者や地域のニーズを把握することもできている。



図6 DCU 地域 PC 倶楽部活動の様子



図7 高校生と地域住民との交流

(2) 車いす整備ボランティア

車いす整備活動は、整備方法の習得や整備の計画・運営・管理などを学んでいくことが主目的である（図8）。その実践として、大学近隣の高齢者施設や社会福祉協議会、高等学校などで貸し出し、利用されている車いすの保守整備ボランティア活動へとつなげていく。

活動当初は、川崎市内の施設等から不要な車いす数台を譲り受け、車いすの仕組みや整備方法などを書籍やインターネットなどの情報を基に学んできた。しかし、整備した車いすを安全に利用するためには、さらに専門的な知識や技術を習得する必要があった。そこで、車いすメーカーの株式会社カワムラサイクル横浜サービスセンター

様にご協力いただき、本学夏期休業中の2008年8月6日に車いす保守整備講習会を開催した(図9)。この保守整備講習会¹³⁾は、通常は車いす販売業者向けに行われているもので、大学では初めて行われた。

車いす保守整備講習会を終えた学生は自信を持ち、自ら整備ボランティアの活動計画を立てるようになった(図10)。また、6ヶ月以上活動している学生がリーダーとなり、活動初心者に対して指導する体制も整った。現在、本学と高大連携を結んでいる高校を中心に訪問・整備活動計画を調整している。



図8 車いす整備の様子



図9 車いす整備講習会の様子

※福祉考房に参加している学生たちが自主活動グループとして企画した車いす整備計画です			H20年10月
福祉考房 車いす整備 後期活動計画書			
月	月間活動予定		詳細
	学内	学外	
2008年10月	個人のスキルアップ		車いすみがき、タイヤチューブ(空気チェック)、部品のゆるみを探す、ブレーキ(前後)の調整
2008年11月	個人のスキルアップ		車いすみがき、タイヤチューブ(空気チェック)、部品のゆるみを探す、ブレーキ(前後)の調整
2008年12月	実践、弱点補強	麻生区社協で車いす整備(調整中)	社協に付けるメンバーは社協にて、実践をこなす、その後反省と、弱点を明確にして、弱点補強をする
2009年1月	個人スキルアップと、できる範囲の向上		個人でできる範囲を広げて、各自の実力アップと人材養成
2009年2月	個人スキル確認、学外活動へのチーム編成	近隣の高校や施設等で車いす整備	春休み活動を週2,3日(予定) 実践力を身につけて学外活動に備える
2009年3月			
2009年4月	個人スキルアップ、人材育成月間	メンバーの状況しだい	車いす整備の人を増えれば、新しく入った人のスキルトレーニング
2009年5月	個人スキルアップ、人材育成月間		車いす整備の人を増えれば、新しく入った人のスキルトレーニング
今後の学外活動予定項目(時期は未定)			活動時間等、参加を迷っている人へ
高齢者施設の車いす整備			いつでも大丈夫です。現在指導可能なのが川名先生をはじめ、現在活動中のメンバー(3人程度)がさまざまな時間にいるのでぜひいつでも来てください。 主に車いすを整備がメインですが、車いすを整備できるようになると、自転車などに応用がきたり、施設に行った際に物知り感覚になれます。
他大学の車いす整備団体との交流及び技術講習会			
車いす講習会(車いす製作会社による)			
近くの社協など貸し出し用車いすの整備			

図10 車いす整備 活動計画書

(3) 自助具製作研究

自助具製作研究は、筆者の専門演習Ⅰでの取り組みが基となり、希望する一般学生にも活動の輪が広がった。活動当初は既に考えられている自助具を模造することから始め、現在は自らアイデアを出して製作するまでに至っている。

工房の工具などが不足しているため本格的な加工ができない場合もあるが、そこも工夫して製作可能なよう改良している。自助具は、できるだけ安価で入手しやすい材料で製作し、構造も簡素なものが良い¹⁴⁾とされるため、製作にあたり不都合な面が逆に学習効果を高める結果となった。

学生の製作した自助具はまだわずかだが、どれもユニークなものである。図11は片手で使える包丁とまな板の試作品だが、一度製作したものを試用して使いづらいつころをチェックし、さらに改良を加えていく途中過程である。図12のフライパンは、握力の弱い人でも手から滑り落ちないように持ち手の先が折り返され、フライ返しは先をカーブさせて通常と逆の動作で手前に引きながら返したり、材料を炒める際に混ぜやすかったりなど、多機能な要素を併せ持っている。図13はスポーツ等で手首を痛めた場合でも手首に無理なくノートが取れるよう、手首を固定しながら筆記用具を使用する自助具の試作品である。

自助具を考える際は、身体状況や障害について考え、人間の動作を観察することが必要である。この能力は援助者としての観察力を養うことにも適している。

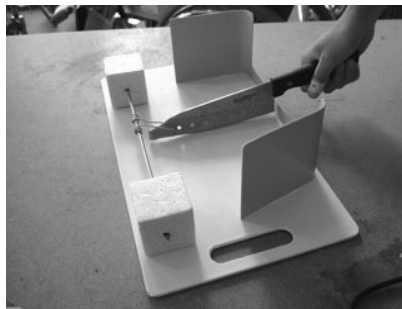


図11 片手で使える包丁の工夫



図12 フライパンとフライ返しの加工

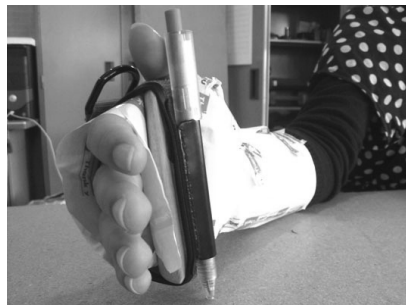


図13 手首障害者向け筆記用具固定具

(4) 福祉機器・用具勉強会

前述してきた活動は実践体験型であったが、福祉用具に関する知識を得るために講義や施設・イベント見学などにも取り組んでいる。

学生は履修した科目の中から知識を得ることが中心であるが、福祉用具の種類は多く、最近では福祉ロボットの急開発などもあって、講座では紹介しきれないのが現状である。そこで、課外の特別講座として、福祉用具企業のパンフレットやカタログの閲覧による学習やインターネット上で公開されている財団法人保健福祉広報協会¹⁵⁾や財団法人テクノエイド協会¹⁶⁾の福祉用具データベース検索を行っている。

また、本学では学ぶことのできない工学分野の情報を得るために「福祉産業新技術フォーラム」に参加したり、国内外の530社・2万点以上の福祉用具が一同に会する「国際福祉機器展」見学、福祉用具販売・レンタル業者の工場見学などを実施した。

これら活動は、学生の進路にも影響を与えており、福祉用具販売・レンタル業への就職希望者が増えている。

4. 学生の活動状況について

福祉考房の活動への参加者数を年度ごとに集計したものを表1に示す。

表1 年度ごとの参加者数比較

年 度	参加希望者数 (人)	参加者数 (人)	述べ参加者数 (人)	活動期間
2007	38	27	73	2007/10/1～2008/1/31
2008	67	62	278	2008/4/1～2008/10/8 現在

参加希望者数に関しては、2007年度は、1年次必修科目「社会福祉実践入門」、2年次以降選択科目「生活福祉工学」で福祉考房について説明し、全学的に希望者を募った。2008年度は、活動者募集ポスターの学内掲示、2年次以降選択科目「生活福祉工学」、筆者の担当科目である「基礎演習Ⅰ」、「基礎演習Ⅱ」、「専門演習Ⅰ」、「専門演習Ⅱ」で活動希望調査を行った結果である。

参加を希望しても授業等で時間が合わず参加できない学生も多かった。そのため、2007年度に希望して参加できた学生は71.1%となった。2008年度には活動回数を増やすなどの改善をしたため、希望者の91.0%が参加している。また、活動期間の違いはあるが、述べ参加者数を参加者数で除した1人あたりの参加回数は、2007年度で平均2.7回、2008年度では平均4.6回と増えており、福祉考房の活動を定期的に行っている結果が現れている。

表2に2008年度の4つの活動内容ごとの実施回数と述べ参加者数、各活動1回あたりの平均参加者数を示す。

自助具製作、福祉機器・用具勉強会は専門演習で実施したため、平均参加者数は高くなっている。また、車いす保守整備は活動希望調査をした際にも希望者が多く、人気のある活動である。しかし、DCU地域PC倶楽部への参加者数が少ない。後述するアンケート結果では、活動日が土曜日の午後であるため、参加しにくい点を指摘する回答もあり、授業のない学生がPC倶楽部の活動のためだけに大学には来ないことも原因のひとつであると考えられる。しかし、PC倶楽部の活動曜日を変更するのは運営上困難なため、土曜日でも参加したいと思える活動内容の改善、学生への更なる周知、正課への組み込みなども検討する必要がある。

表2 2008年度の活動内容ごとの実施回数と述べ参加者数

活動内容	実施回数(回)	述べ参加者数(人)	平均参加者数(人)
DCU地域PC倶楽部	12	19	1.6人
車いす保守整備	17	112	6.6人
自助具製作研究	12	69	5.8人
福祉機器・用具勉強会	8	60	7.5人

表3に2008年度の学科・専攻、性別および学年別の参加者数を示す。

表3 2008年度の学科・専攻、性別および学年別の参加者数

	1年	2年	3年	4年	計
地域 男	12	9	11	6	38
地域 女	1	5	3	4	13
社会 男	1	0	4	0	5
社会 女	0	6	0	0	6
介護 男	0	0	0	0	0
介護 女	0	0	0	0	0
計	14	20	18	10	62

地域福祉学科生の参加者が多いが、これは筆者が担当する基礎演習Iおよび専門演習Iで車いす整備や自助具製作を行ったためである。

人間福祉学科社会福祉専攻の参加学生は少ないが、活動に参加している学生は積極的で、自主活動の中心にもなっている。福祉考房の活動をもっと魅力的に伝えることができれば、さらに参加者を増やすことも可能だと考える。

介護福祉専攻の学生は活動者がいない。活動希望調査でも他の学科・専攻に比較すると希望者が少なかった。介護者の負担を軽減するためには、介護技術の習得とともに福祉用具の上手な活用は欠かせない。この点を学生に伝え、活動者が増えるよう今後の活動、呼びかけを考えていく必要がある。

IV 福祉考房の評価アンケート

1. 方法

福祉考房の活動内容に対する評価および今後の活動に望むことを参加者から得るため、活動経験者に図 14 のようなアンケート用紙にて、調査を行った。

調査期間は、2008年10月6日～10月10日であった。アンケート用紙は、2008年4月1日～2008年10月8日までの活動者62名のうち52名に配付し、匿名の任意回答で40名分を回収した。アンケート回収率は76.9%で、活動経験者のうち64.5%の回答を得た。

<p>福祉考房アンケート</p> <p>学科・専攻：_____、 学年：____年、 性別： 男・女、 活動期間：_____ヶ月、 _____回目</p> <p>1. 福祉考房ではどの活動に参加しましたか？（複数回答可）</p> <p>①DCU 地域 PC 倶楽部 ②車いす保守整備 ③自器具製作 ④福祉機器・用具勉強会</p> <p>2. 福祉考房の活動に参加しようと思ったきっかけは何ですか？（複数回答可）</p> <p>①活動内容に興味を持ったから ②ポスター・チラシを見て興味を持ったから ③友達に誘われたから</p> <p>④福祉用具の知識を増やしたいから ⑤福祉援助者になるためには必要な知識だと思うから</p> <p>⑥空いた時間を有効に使いたいから ⑦その他（ _____ ）</p> <p>3. 福祉考房の活動を通して、福祉機器・用具等に関する理解は深まりましたか？（該当する1つに○）</p> <p>①深まった ②やや深まった ③あまり深まらなかった ④深まらなかった</p> <p>4. 質問3の選択肢を選んだ理由を教えてください。</p> <p>5. 福祉考房の活動を通して、福祉の様々な分野についての興味は増えましたか？（該当する1つに○）</p> <p>①増えた ②やや増えた ③あまり増えなかった ④増えなかった</p> <p>6. 質問5の選択肢を選んだ理由を教えてください。</p> <p>7. 福祉考房の活動で良かった点は何か？（自由記述。足りない場合は用紙の裏を使用してください。）</p> <p>8. 福祉考房の活動で改善して欲しい点は何か？（自由記述。足りない場合は用紙の裏を使用してください。）</p> <p>9. 福祉考房の活動を友人や後輩に勧めたいですか？</p> <p>①勧めたい ②やや勧めたい ③あまり勧めたくない ④勧めたくない</p> <p>10. 質問9で③または④と回答した人はその理由を教えてください。</p> <p>※ これは授業の成績や活動の有利・不利に関することはありません。活動の改善のために使用させていただきますので、ありのままを回答してください。</p>

図 14 アンケート用紙

2. 集計結果と考察

アンケート集計は、Microsoft Excel を使用して単純集計したものである。また、それらの結果を表とグラフにしたものを以下に示す。

回答者の傾向を見るため、表4に学科・専攻、性別および学年別のアンケート回答者数を示す。また、回答者の活動期間を表5、活動回数を表6に示す。

以上から、活動の中心は2,3年生で、6ヶ月以上参加している学生も多いことがわかる。

表4 学科・専攻、性別および学年別のアンケート回答者数

	1年	2年	3年	4年	計
地域 男	4	9	5	3	21
地域 女	1	5	3	2	11
社会 男	1	0	3	0	4
社会 女	0	4	0	0	4
介護 男	0	0	0	0	0
介護 女	0	0	0	0	0
計	6	18	11	5	40

表5 活動期間

活動期間	回答者数
1ヶ月以内	8
2～3ヶ月	8
4～5ヶ月	1
6ヶ月以上	23

表6 活動回数

活動回数	回答者数
1回	9
2～5回	15
6～10回	12
11回以上	4

アンケート用紙の設問ごとの回答結果を以下に示す。

(1) 福祉考房ではどの活動に参加しましたか？（複数回答可）

表7に活動内容ごとの参加人数と回答者に対する参加割合を示す。

この表から、車いす保守整備への参加が一番多く、次に自助具製作が多くなっている。学生の希望を取って活動内容を決めている面もあるので、車いす保守整備と自助具製作への興味が高いことがわかる。

表7 参加した活動

活動内容	参加人数（人）	回答者（40名）に対する割合（％）
1. DCU地域PC倶楽部	14	35.0
2. 車いす保守整備	28	70.0
3. 自助具製作	13	32.5
4. 福祉機器・用具勉強会	6	15.0

(2) 福祉考房の活動に参加しようと思ったキッカケは何ですか？（複数回答可）

活動に参加しようと思ったキッカケを項目ごとにまとめたものを表8に示す。

表から半数以上が「1. 活動内容に興味をもった」と回答し、「4. 福祉用具の知識を増やす」「5. 援助者として必要」という回答も多かった。このことから、参加学生の多くは活動に積極的であることがわかる。一方、その他と回答した学生の中には、授業だから参加したという学生も6名（15.0%）ほどいた。

表8 活動に参加しようと思ったキッカケ

キッカケ	回答者数	回答者(40名)に対する割合(%)
1. 活動内容に興味をもった	23	57.5
2. ポスター・チラシ	3	7.5
3. 友達に誘われた	6	15.0
4. 用具の知識を増やす	14	35.0
5. 援助者として必要	9	22.5
6. 時間の有効活用	3	7.5
7. その他	9	22.5

「7.その他」と回答した内容・・・ 授業（6名）、先生に誘われた（1名）

(3) 福祉考房の活動を通して、福祉機器・用具等に関する理解は深まりましたか？（該当する1つに○）

表9に活動を通じた福祉機器・用具等に関する理解度を示す。また、図15に理解度ごとの回答率を円グラフで示す。

「1. 深まった」「2. やや深まった」と回答した学生は、37名（92.5%）で、理解度が非常に高かったことがわかる。

表9 福祉考房の活動を通じた福祉機器・用具への理解度

理解度	回答者数(人)
1. 深まった	24
2. やや深まった	13
3. あまり深まらなかった	3
4. 深まらなかった	0

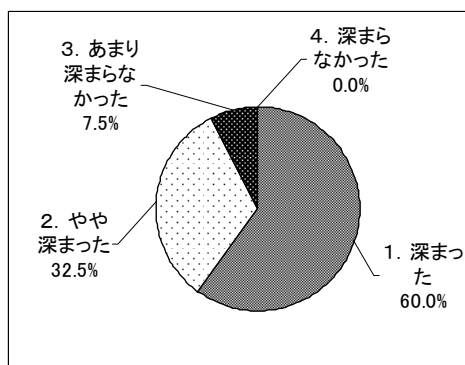


図15 福祉考房の活動を通じた福祉機器・用具への理解度

(4) 質問3の選択肢を選んだ理由を教えてください。(自由記述)

「1. 深まった」と回答した人の記述

- ・ いろいろな福祉機器が多く見られた
- ・ 今後、福祉用具専門相談員か生活相談員をしながら、用具の知識を活かした職に就きたいと思えたから
- ・ バリアフリー商品が身近にあるから
- ・ 実際に福祉用具を使いながらだったので覚えることができた
- ・ 今まで福祉用具・機器の使いやすさ、問題点などを考えることはあまりなかったが、活動していくうちに様々なことを考えるようになった
- ・ 知らなかったことを知ることができた
- ・ 授業以外で福祉機器に関することを知ったので
- ・ 実習中にも車いす修理の知識が活かされた
- ・ 実際に福祉用具を作ってみて、利用者の気持ちを考えたり使いやすさを考えたりして、福祉用具について勉強になった
- ・ 福祉用具に対して今まで知らなかったことを知り、知識がより深められた
- ・ 車いすのことちょっとわかった気がする
- ・ 現在開発中の福祉用具や取り組みを学ぶことができた
- ・ 実際に地域の高齢者とコミュニケーションを取れた
- ・ 座学でなくて実際に触ったり、話したりできたから
- ・ 車いすの種類とか仕組みとかわかった
- ・ パソコンのテクニックも覚えたり、いろんな人と話して、今まで経験できなかったことが経験できた
- ・ 車いすを実際にバラしたりして、よくわかった
- ・ 講義と違い体を動かしながらできるのが楽しく理解できた

「2. やや深まった」と回答した人の記述

- ・ 思ったよりも難しい構造をしていた
- ・ 今まで経験できなかったことを経験できた
- ・ 福祉用具を作るにあたって、様々な知識や技術が必要だとわかった
- ・ パソコンの操作を覚えるだけで精一杯
- ・ 車いすが意外と怖い

「3. あまり深まらなかった」と回答した人の記述

- ・ 1回しか参加してないため、まだ判断できない

「4. 深まらなかった」と回答した人の記述

・なし

「1. 深まった」「2. やや深まった」との回答者の記述を見ると、実際に車いすや福祉用具に触れながらの体験学習が理解を深める助けをしたことがわかる。今まで考えなかった利用者の気持ちや福祉用具についての課題などにも気づき、援助者としての観察力も増したといえる。また、実習中に車いす修理の知識が活かされたという意見があったが、福祉考房の活動中にも実習先で車いすを5台ほど整備したと話す学生がいた。このことは福祉考房での実践学習が、現場での再現性・実現性を確認できたと考える。この学生によれば、施設の職員に時間的余裕はなく、車いすの軽整備が自分でできると考えていなかったため、タイヤの空気が少ないまま使用されていたり、ブレーキ調整ができていない車いすをそのまま使用している例が多かったということだ。

さらに、福祉用具に興味を持ち、福祉用具専門相談員や生活相談員などの具体的な進路目標を持つなどの影響を与えていることもわかった。

一方、「3. あまり深まらなかった」との回答は3名であったが、その理由としては参加回数が少なく、まだ評価できないということであり、活動を否定したものではなかった。

(5) 福祉考房の活動を通して、福祉の様々な分野についての興味は増えましたか？（該当する1つに○）

福祉考房の活動を通して、福祉の様々な分野についての興味が増えたかという質問に対する回答を表10に示す。また、図16に興味度ごとの回答率を円グラフで示す。

「1. 増えた」「2. やや増えた」と回答した学生は34名（85.0%）であり、福祉考房の活動を通して、福祉用具やパソコン教室以外にも興味が増えたことがわかる。

表10 福祉考房の活動を通した、福祉の様々な分野への興味

福祉の様々な分野への興味	回答者数
1. 増えた	15
2. やや増えた	19
3. あまり増えなかった	5
4. 増えなかった	1

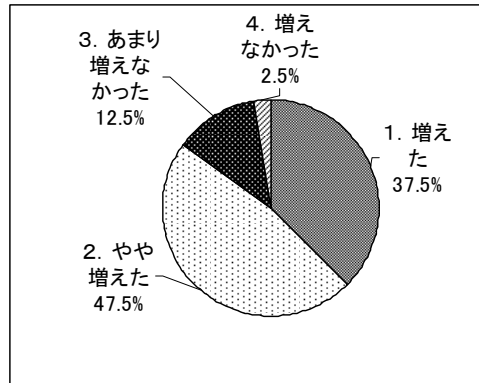


図 16 福祉考房の活動を通した、福祉の様々な分野への興味

(6) 質問 5 の選択肢を選んだ理由を教えてください。(自由記述)

「1. 増えた」と回答した人の記述

- ・今まで見えてない部分が見えた
- ・モノ作りにはいろいろな分野の知識が集結してできているから
- ・自分の道が少し見えた気がした。福祉のいろいろな道の新たな発見があり、機器をたくさん知ることができる
- ・介護保険について興味深くなった
- ・福祉機器展でいろいろな福祉機器を見て触れられた
- ・福祉のいろいろな分野がどんなふうにつながっているのか気になった
- ・他の福祉用具の使い方とか興味がわいた
- ・いろいろな世代、人とのコミュニケーション方法に興味を持った
- ・今まで考えてなかったようなことも考えるようになった

「2. やや増えた」と回答した人の記述

- ・障害者の分野に興味は増えた
- ・福祉用具の分野に興味を持った
- ・社会福祉専攻のため介護技術を学ぶ授業があまりないので、車いすをどのように整備すれば使いやすくなるのかなど、介助する側の立場になって考えるようになった
- ・バリアフリーや在宅福祉について興味が増えました
- ・他の分野との関わりを考えるようになった
- ・バリアフリーなどについても興味が出た
- ・福祉の仕事、活動が広いと感じることができたため
- ・近所の人たちの困っていること、高齢者の生活などに興味を持てた

- ・高齢者の気持ちを知れた
- ・障害のある方の生活を考えるようになった

「3. あまり増えなかった」と回答した人の記述

- ・もともと福祉用具にしか興味がないから
- ・福祉用具の作成にのみ集中していた
- ・まだあまりよくわからない

「4. 増えなかった」と回答した人の記述

- ・なし

福祉の様々な分野に興味がある「1. 増えた」「2. やや増えた」と回答した学生の記述を見てみると、回答内容は多岐にわたり、個々人で受け止め方が違っていることがわかる。ただし、福祉考房の活動を機に、福祉の分野ごとのつながり、モノづくりには色々な分野の知識が必要など、分野ごとのつながりに興味を持てたことは、社会福祉士養成課程において専門意識を高める効果や他分野との連携の必要性を知るきっかけになったと考える。

一方、「3. あまり増えなかった」と回答した学生（5名、12.5%）は、ひとつの考え方に固執している傾向が見られた。専門性を高める点では良いが、様々な考え方やつながりがあることに気づき、広い視点を持つことは必要である。今後の活動でそれらを伝えるプログラムの工夫が必要である。

(7) 福祉考房の活動で良かった点は何ですか？（自由記述）

- ・車いすの仕組みや構造、部品などがわかって良かった
- ・車いすにたくさん触れたこと。先輩たちと仲良くなったこと
- ・車いすや普段あまり関われないことが勉強できた
- ・実際に車いすの整備ができたこと
- ・福祉用具の知識向上。車いすの知識向上と道具の扱い
- ・車いすの整備は大学の講義では機会がないので良い経験になった
- ・学年を超えた交流、地域交流ができた
- ・普段の生活や授業では扱わない車いすなどの福祉機器に実際に触れたり、分解したりできたこと
- ・まだまだ知らないことを学べたこと。また、やりがいがある
- ・（自助具を）実際に作ることで難しさを学べた。車いすの見方が変わった
- ・座学だけでないところ

- ・ 道具がそろっているのが困ることが少ない
- ・ 自助具作り
- ・ 自由に利用できる。材料や作成物を預けるロッカーが便利
- ・ 福祉用具を作成することの難しさがわかった
- ・ 利用者の使いやすさを考えながらできた。なんとか完成させることができた
- ・ 自由参加で、個別指導していただけた点
- ・ 先輩と話せた
- ・ 車いすを使えたこと
- ・ 授業だったけど、講義じゃなかった
- ・ 気軽に参加できたこと

車いす整備や自助具製作など、体験学習の満足感について回答した学生が多かった。また、学生同士や地域との交流を深められた点、気軽に参加できる点、少人数による個別指導ができた点などを良かった点として挙げた学生もいた。

一方、実際にモノづくりをすることの難しさを知ったと回答した学生もいた。自助具づくりでは障がいによる身体状況の理解が難しかったこともあるが、ドライバーやヤスリなどの簡単な工具の使用方法がわからないなど、学生の生活や遊びの中で道具を使ったり、モノづくりしたりする経験が少なくなっていることも原因であると考えられる。この点では、工具の使い方などの基礎的な指導を徹底し、安心して活動に取り組める仕組みを構築する必要もある。

(8) 福祉考房の活動で改善して欲しい点は何ですか？（自由記述）

- ・ 活動日を増やして欲しい。学園祭等で何かやりたいです。
- ・ 作業できるスペースの拡大
- ・ もう少し気軽に活動できた方がよい
- ・ 工具の数と作業スペースを拡大して欲しい
- ・ もう少し、機材を増やして欲しいと強く思う。
- ・ 二人一組で作業した方がやりやすかったかもしれないと思った。
- ・ カーペットが作業で汚れる。実際にある福祉用具の展示やカタログ戸棚があればよいと思う
- ・ どんなことをやるのか事前に教えてください
- ・ 土曜日だと厳しい。他の曜日がいい

改善点については、整備や製作を効率よく進めていくために「作業スペース拡大」

と「工具・道具の増強」の回答が多かった。活動当初はこのような意見は聞かれなかったが、参加者数も増え、作業内容も高度化、複雑化したために出てきた回答であろう。建物の広さを拡大することはできないため、作業者同士がぶつかったり、工具の取扱中にケガをしないよう、安全に配慮した効率よい作業スペースの確保や一度に活動する人数を制限するなど対策を講じる必要もある。そのほか、活動日を増やして欲しい、土曜日では厳しい（PC 倶楽部）などの活動日程についての回答もあった。

車いす整備と自助具製作の活動日については、安全面と指導面の観点から授業もしくは筆者の空き時間で対応してきた。学生とともに改善方法を検討した結果、下記3点を実施することとなった。

① 活動グループの組織化

活動回数が多く、経験を積んだ学生をリーダーとして、活動グループを組織する。

今までは、教員から学生への知識と技術の伝達为中心であったが、今後はリーダー学生も活動初心者に対して知識、技術を伝え、ともに活動していく。教えることで自らの知識・技術を確立し、リーダーとしての判断力や行動力を養う機会にもなる。

② 活動マニュアルの作成

福祉考房の活動で積み重ねた知識、経験などをまとめた活動マニュアルを作成する。

福祉考房の趣旨、活動の紹介、高齢者・障がい者の生活と支援技術、安全な工具の使い方、車いす整備方法、自助具製作など、基礎的な内容を含めることで、これから参加する学生が福祉考房内でどのようなことが経験でき、何をすべきか理解する補助教材とする。

③ 車いす整備技術認定制度（福祉考房内資格）

車いす整備については専門家による整備講習会を開催したものの、個々人の整備技術にはバラツキがある。整備の質を保つために、自らの技術を確認する意味でも基準を作る必要を感じる。たとえば、パンク修理をする際に、使用する工具や整備方法を間違えていると、チューブを傷つけてしまったり、スムーズにタイヤが回らなかったりなどの不良も考えられる。

整備項目ごとの基準を決め、それができるかどうかをチェックする仕組みを考える。合格者には、項目数や質によって級を与え、活動の目標に位置づける。学生は目標ができることで、活動への更なる意欲向上が望める。

(9) 福祉考房の活動を友人や後輩に勧めたいですか？

福祉考房の活動を友人や後輩に勧めたいかという質問の回答を表 11 に示す。

「1. 勧めたい」「2. やや勧めたい」とした回答をあわせると 100% となり、活動の意義、楽しさなどを十分理解しているものと考えられる。

「質問(2)福祉考房の活動に参加しようと思ったキッカケは何ですか？」で、友人に誘われたと回答した学生は6名(15.0%)である。この調査後の活動でも、友人や後輩を誘って参加している学生が増えており、前述した改善点で挙げた活動グループを積極的に組織化し始めている。

表 11 福祉考房の活動を友人や後輩に勧めたいか

友人や後輩に勧めたいか	回答者数
1. 勧めたい	23
2. やや勧めたい	17
3. あまり勧めたくない	0
4. 勧めたくない	0

(10) 質問9で③または④と回答した人はその理由を教えてください。

質問9で③または④と回答した学生がいなかったため、質問(10)の記述はなかった。

V おわりに

福祉考房では活動への自主的な参加を促すために、生活福祉工学の授業時や活動に興味を持った学生への説明などをおこない、“能動的参加”の活動者を募ってきた。一方で基礎演習や専門演習などの必修科目において、福祉考房での“受動的参加”の活動も行ってきた。

今回のアンケート結果から、活動の参加者は“能動的参加”“受動的参加”の別に関わらず取り組みへの満足度は高く、福祉用具の理解向上、地域住民のニーズ把握、福祉の様々な分野のつながりなど、援助者として必要な視点、能力を高めることができていると考える。

このことから、福祉考房での実践学習は学生の意欲向上につながり、福祉分野への興味関心を深めることに役立っているといえる。社会福祉士養成課程において、福祉考房のような実践学習は効果があるものと結論づける。

一方で、今後の課題も見えてきた。

DCU 地域 PC 倶楽部に関しては、事前説明の中で学生の役割をしっかりと伝え、事後の反省会、感想を述べる機会などを設け、参加者からの意見をさらに反映させることが必要である。また、参加学生を増やすためには正課の中に組み込み、実施曜日を調整することも検討する。

車いす整備ボランティアは、学生による自主活動が展開され始めた。整備を確かなものにするマニュアルづくり、作業項目を把握し定期的な車いす整備を進めるためのチェッ

クシートなど、活動をスムーズに運営していくためのプロジェクトマネジメントを学習し、実践していくことが必要である。

自助具製作においては、学生の発想で自助具を考案するだけでなく、当事者のニーズ調査から必要なものを把握、製作、評価していくシステムが構築できると、より一層活動が有意義なものになると考える。

全体としては、工場の設備をさらに充実させ、学生が安心して活動できるよう見守りと技術指導などを行っていきながら、活動者を全学的に増やしていきたい。

本稿が社会福祉士養成課程における実践学習のあり方の一考察となり、利用者をより深く理解し、支援技術をしっかりと身につけた援助者養成の一助となれば幸いである。

<引用文献・参考文献>

- 1) 文部科学省「大学教育の充実－ Good Practice －」、
http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/kaikaku/gp.htm (2008/10/3 閲覧)
- 2) 内閣府「平成 20 年版 高齢社会白書」2008 年、2～3 ページ
- 3) 西誠、谷正史「金沢工業大学夢考房の教育支援プロジェクトにおける1つの試み」日本機械学会関東支部第8期総会講演会講演論文集、2002 年、435～436 ページ
- 4) 増田晶文「大学は学生に何ができるか『学生を元気にさせる』大学改革とは」プレジデント社、2003 年
- 5) 神奈川工科大学 KAIT 工房、<http://www.kait.jp/~kaitkobo/> (2008/9/12 閲覧)
- 6) 松本大学地域づくり考房『ゆめ』、http://www.matsumoto-u.ac.jp/matsumoto_u/yume/ (2008/7/25 閲覧)
- 7) 財団法人テクノエイド協会「福祉用具を上手に利用するための Q&A」2008 年
- 8) 京極高宣、市川湧「福祉用具の活用法」北隆館、2007 年、10～15 ページ
- 9) 隆島研吾、川名正昭、萩原利昌ほか「リハビリテーション専門職と中小企業技術者の視点で見た福祉用具の課題と可能性調査」平成 18 年度川崎市産業振興財団受託事業報告書、2007 年
- 10) 椎名清和、寫末憲子ほか「社会福祉士養成課程における福祉用具の教授法」つくば国際大学研究紀要 No.13 2006 年、115～127 ページ
- 11) 田園調布学園大学 福祉考房、<http://users.dcu.ac.jp/~koubou/> (筆者管理)
- 12) 川崎市経済局「かわさき基準」<http://www.kawasaki-net.ne.jp/sbk/kis/> (2008/9/1 閲覧)
- 13) 株式会社カワムラサイクル「車いす保守整備講習会」
<http://www.kawamura-cycle.co.jp/seminar.htm> (2008/9/10 閲覧)
- 14) 加倉井周一編「リハビリテーション機器－適応と選択－」医学書院、1989 年
- 15) 財団法人保健福祉広報協会、<http://www.hcr.or.jp/search/> (2008/10/15 閲覧)
- 16) 財団法人テクノエイド協会、<http://www.techno-aids.or.jp/> (2008/10/15 閲覧)